



Title	サルトル哲学に対する一つの視点
Author(s)	河西, 章
Citation	北海道大学人文科学論集, 8, 25-46
Issue Date	1971-05-11
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34295
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_PR25-46.pdf



サルトル哲学に対する一つの視点

河 西 章

一

ベルグソンが死んで、ジイドが去って、哲学の領域でも、文学の領域でも、一つの時代を代表するような巨匠がいなくなつてからのフランスにおいて、サルトルほど絶えず話題を喚び、我が国にも紹介されつづけた作家はいなかった。その哲学作品は難解であるとともに、おおむね不評であり、その初期の作品以来を貫ぬく基本的傾向も必ずしも明瞭でなく、その文体の明哲さ、その体系を築き上げる論理的構成力においては、はるかにベルグソンに及ばないサルトルが、なぜ、両大戦間の最後の哲学者と呼ばれ、戦後のフランスの代表的思想家となつたのかは、彼の哲学作品を読むかぎりでは、その理由が必ずしもはっきりしない。その明哲さはメルロー・ポンチに及ばず、その構成力においてはガブリエル・マルセルに及ばないように見えるサルトルが、このような照明を浴びつづけたについては、明らかに彼の文学作品における成功が与つて力があつたに違いない。その哲学作品とは逆に、その文学作品は、とくにその戯曲は、いずれもめざましい成功を収めている。ポール・リクールがウイルフリッド・デサンに語つたといわれるように、サルトルは確かに同時代の他の人々の『誰よりも頭と肩とだけ高いところにいる』のだが、それは多分に彼の文学での成功に負っているのだ。彼は現代のベルグソンであるよりも、『現世紀のヴィクトル・ユーゴー』なのだ。

一九四六年に、雑誌『現代』(Les temps modernes)を創刊して以来、サルトルの仕事の重点は、時事問題についての分析と評論に移ったように見え、精力的な発言を同誌を通じて発表しつづけて、フランスの世論に一定の影響を与えつづけて来た。彼のマルクス主義への発言と、とくに五〇年代から始まって、六一年の『弁証法的理性批判』で頂点に達したマルクス主義への接近も、『コミュニストたちと平和』をはじめとして、『唯物論と革命』、『スターリンの亡霊』などの一連の時事評論の仕事の中にそれを解く鍵があることは誰の目にも明らかである。

『われわれは『プロヴァンシアル』の芸術を賞讃する。……『プロヴァンシアル』は、その時代においては、時事問題の著作以外の何であつたであらうか。』と、述べるサルトルにとっては、時事的な発言と論争は得意の舞台なのである。サルトルにとっては、マルクス主義に対する発言も、いくつかの哲学作品も、時局に対する主として政治的な分析の補助手段に他ならなかつたのかも知れないのである。このサルトルの得意の舞台には、カミュが、ルフォールが、さらにはメルロー・ポンチさえもが引きこまれた。ここでのサルトルの鋭い時事問題への関心と、しばしば人を驚かすショッキングな発言が、人々の注目を集め、彼の名声の一部をなしていたことは確かだろう。

要するに、事実の上からも、またサルトル自身の本意からしても、大別して、文学作品と、哲学上の諸論文と、時事的な評論との三つのグループからなる彼の仕事は、互いに補完し合つて一つの全体をなすものとして理解すべきものであらう。

ところで、フランスにおける優れたサルトル論が、たとえばジャンソンのものにせよ、アルベレスのものにせよ、サルトルの文学作品の中に、サルトルの作品全体を貫く根本モチーフをさぐり当てようとし、それに基づいて、サルトルの内面的変化や、全体像の模索をおこなおうとしているのに対して、我が国では、本格的なサルトル論は、『存在と無』にがっちり取り組んだ、金子武蔵氏のものからはじまって、竹内芳郎氏、寺沢恒信氏、村上嘉隆氏ら、主として哲学作品の分析を中心とするものが多く、アメリカをはじめ西欧各国や、東欧などでのサルトルに関する論

文も、彼の哲学についてのものが多いように思われる。しかし、これらのサルトルの哲学作品の研究も、金子氏のもの以外はとおおむね、サルトルの哲学とマルクス主義との関係を扱っていて、その研究の背後には、比重の差はあれ、サルトルの時事問題についての発言が考慮されているといううる。

初期の『想像力』からはじまって、『自我の超克』、『想像的なもの』を経て、四三年の『存在と無』という頂点に至る、解放前のサルトルの哲学作品は、その難解な発想法といい、ドイツ哲学風用語法といい、フッサール、とくにハイデッガーの影響を強く受けており、ベルグソンの、あの極度にフランス語の洗練さを生かした、明哲な文体に触れて来たフランスの知識人たちには、一読してなじみにくいものと思われたに違いない。ベルグソンの哲学も決して理解の容易なものとは言えないが、少くともそこでは、当時の全ての知識人の共通の基盤としてのフランス唯心論の伝統や、カントの認識論についての知識が前提となっていた。ハイデッガーの思想を、その用語まで含めて、そのまま翻訳した上に、さらに一般の人々にはなじみの少なかったヘーゲルの『精神現象学』などに由来する、即自的、対自的といった弁証法の概念を混入した『存在と無』の前半部が、極めて異質なものとして違和感を与えたのは当然である。現象学の導入も、主として戦後に至ってであり、その理解が、メルロー・ポンチらの先駆的努力を基礎として、最近ようやく開花したように見えるフランスの思想界では、サルトルの初期の論文が、ジャン・ヴァールをとりまく、ごく一部の人々にしか評価されなかったのも止むを得ないことである。サルトルの哲学作品の中には、確かに、フランスの思想界がやがて当面すべき、現代社会における知識人の位置と運命の問題が、内面的自由の問題を介して正面から扱われていたのだが、人々は、『嘔吐』をはじめとする彼の文学作品を手がかりとしてしか、それを理解することができなかった。

『嘔吐』のロカンタンのうちには、明らかにジイドの『法王庁の抜け穴』のラファディオの分身が見出され、その無償で、空虚な自由が、『蠅』のオレストのうちでどのように変身をとげて行ったかということのうちに、その後の

文学作品の主人公たち、たとえば『自由への道』のマチウや、『汚れた手』のユーゴーや、『悪魔と神』のゲッツらの生み出される必然性を理解することの方が、『存在と無』の前半を貫ぬく、ハイデッガー的な、ペシミスティックな自由が、その後半の、社会的かわり合いと責任の論理に移り変ってゆくことを理解するよりもずっとたやすいことだったにちがいない。

サルトルの哲学者としての名声と、彼の哲学思想への関心にも拘らず、我が国においても、サルトルの作品のうち最も読まれるものは文学作品だと思われる。そして、戦後にサルトルが紹介されたとき、フランス文学についての素養を多く持ったわが国の知識人たちは、前述のフランスの知識人と同様のことを体験した筈である。

それ故、サルトルの思想を貫くものを見出す重要な鍵を、さし当り『嘔吐』以後の文学作品の主人公たちの肖像のうちに、そこに描き出された、フランスの、ひいては現代社会における知識人の自画像の中に見てゆくことは、入り易く、かつ有効なやり方であろうと思われる。

二

サルトルの文学作品を手掛りにして書かれた二つの優れたサルトル論のうち、ジャンソンのそれは、いわばサルトルの哲学を、彼の戯曲を中心とする文学作品で解こうとしているのに対して、アルベレスのそれは、哲学作品をむしろ、サルトルの文学を説明する手掛りと考えている。⁽⁶⁾しかし、いずれもが、『嘔吐』のロカンタンから、『蠅』のオレストへの変身の中に、『存在と無』の社会的かわり合いとしての自由の説明の手掛りをもとめていることは共通している。そして、この変身のメカニズムを知ることが、『自由への道』や、『汚れた手』で意識されるに至った、知識人とマルクス主義との関係の問題を理解する鍵となつていてと考える点においても、両者の考え方はほぼ一致しているのである。

ところで、サルトルの文学上の名声は、今日では、より高く評価される『嘔吐』や『自由への道』というロマンを通じてではなく、四三年の『蠅』の成功にはじまる戯曲によつて築かれたといえる。

『サルトルが真の意味で《大衆的》となったのは、おそらく彼の戯曲によつてであろう。それが彼の作品のうちでいかにも一ばんはいりやすい部分なのである。むしろ、一ばんよく理解されているということにはならないが、少くとも論文や純哲学的な著作よりは多数の人にとつて親しみやすい。そのうえ、それはサルトル的テーマのほとんど全部を解明し劇化するという長所をもっている』と、ジャンソンは、そのサルトル論の冒頭で述べている。

このことは小説についても言えることではあるが、『嘔吐』はより分りにくく、『自由への道』は未完のままである。しかも、これらの小説の主人公に対しては、にわかに共感はおろか、理解さえも期待できなかったことは、ジャンソン自身が、『《自由への道》は、はじめの三〇ページから先へ進むことがどうしてもできなかった』と後になつて告白していることからも推察しうるであろう。

アルベレスが指摘しているように、四三年までのサルトルの作品に描き出されているものは、『嘔吐』のロカンタ⁽⁸⁾ンが体现し、『壁』の私(イビエタ)が一層シニカルに示そうとした、当てのない、無償の自由⁽⁸⁾に他ならない。この永遠の待機に他ならない自由の中に、一方、一切の道徳や、既成の慣習から自由であるとしても、他方、専心すべき何ものも見出せない、ジイドの作品の主人公たちの分身を見出すことは容易である。この主人公たちが、ジイドの『背徳者』の主人公のようなアフリカの砂漠というやや幻想的な背景の代りに、身近かで切実なファシズムの嵐の前ぶれを体験したならば、二〇年から二五年にかけての甘美な時代が、すでにすぎ去つたのだという悲痛な感覚を持ちながら、また、この個人主義的な自由の空しさを知つて、それをより実りあらしめ、より具体化できるような方向を沈うつな気分の中で模索しはじめて、ひとりカフェのテラスから街々を、大衆を眺めている、あのロカンタンに变身することは容易である。

『蠅』のオレストが当面したのもまた、あの自由の具体化の化身となるという問題であり、その自由を取り巻く状況を発見することであった。サルトルの全ての作品は、自由のドラマであるとともに、状況内での、具体的自由の劇化である。

『蠅』の背後には、明らかに、ナチ占領下のパリの重苦しい雰囲気がある。その屈辱の中で、いわば『穿にかかった』、『ねずみとりにつかまった』ような人間の自由が問題とされるのである。しかし、『蠅』の最後的一幕で、一方、全てが変わるとともに、他方、外面的には何も変わらない。賭の対象はあくまで主人公の内面の自由であり、賭が終ったとき、かちえられるものもまた内面の充実だけなのである。

状況における自由を支えるものは、一種の主意主義に他ならない。⁽⁹⁾『人間が無力なのは、みずから無力であることを承認したときだけ』と、サルトルは別のところで言っている。

ロカンタンにとつても、オレストにとつてと同じ様に、客観的事態は絶望的である。めまいに似た不安が、何か知らぬ病いの徴候のように、心をむしばみはじめるのを感じる。その『吐き気』は、自分が理由づけられた存在でないことへの恐怖であるとともに、この空しく、はてしなく世界の表面を上すべりしてゆく自己に比して、確固として、蔽として世界に根をおろしている事物に直面したときの、その不透明さへの嫌悪を伴った恐怖でもある。『存在するとはただ単にそこに在るということである。存在するものは現われ、出会うままになる。しかし決して、存在するものを演繹することはできない。……すべてが無償である。この公園も、この街も、そして私自身も。もしこのことを理解するならば、それは人々の考えを変え、すべてがいつかの晩のように漂いはじめる。それが『吐き気』なのである。⁽¹⁰⁾』

状況内の自由、具体的な世界とのかかわり合いは、後に責任という倫理的なものに転化してゆくとしても、さしあたりはこの『吐き気』の余病であり、われわれ自身の存在の無償性から来る恐怖なのである。ロカンタンの単調きわまる生活の日誌の最後におけるただ一つの劇的なより上りは、この吐き気の中で、めまいとともに確認される一つの

世界の崩壊である。

『……ところで、しばらく前、私は公園にいた。マロニエの根はちょうど私の腰かけていたベンチの真下の大地に深くつきささっていた。それが根であるということが私にはもはや思い出せなかった。ことばは消えうせ、ことばとともに、事物の意味もその使用法も、また事物のうえに人間がしるした弱い符号も、みな消え去った。……それから私は、あの啓示を得たのである。それが、一瞬、私の息の根をとめた。この三、四日前には、『存在する』ということが何を意味するかを絶対に予感しなかった。……いつもは存在は隠れている。存在はそこに、われわれの周囲に、われわれのなかにある。それはわれわれである。存在について語らずには何ひとつ言えない。しかし結局存在に手を触れることはできないのである。』⁽⁹⁾

この存在の体験ほど、サルトルの実存思想の出発点を巧みに描き出した文章は他に見当たらない。⁽¹⁰⁾ オレストが、一種の硬直の中で感じたものと同様のもの、『善も悪も、僕に命令する人も』消え失せて、『癲病やみのような孤独』の中で確認される自由がそこにはある。

すべてがなじみ深く、すべてがその意味と用途を知られた事物にかこまれて、隅から隅まで透明な、一切のものの意味が明らかで、すべてが自分にほえみかけて来る一つの世界が、この体験の中で、ガラスの城のように砕け散って行くのだ。昨日まで、あのマロニエは自分の眼をその緑でなごませてくれ、かぐわしい大気で自分の胸を清めてくれた。公園のベンチは自分が腰を下すのを待っており、街の物音も夕方のなごやかさをかえって強めてくれる。あの通りの向うには、これから自分の行くのを待っていてくれるレストランがあるだろう。その向うには角のタバコ屋のなじみ深い店がある。この世界では、すべてがその意味が分っており、すべてが自分のために、自分を祝福するためにある。意味の分らぬ、不透明な、気味の悪いものはこの世界には一つもなかったのだ。しかし、今、この世界を満たすものは不気味な、敵対的な、意味づけを欠いた、えたいの知れぬ他者である。なれ親しんだペットのようだった

た事物のかわりに、そのベットの死骸のような不気味で、吐き気をもよおすものが充滿している。しかし、この不気味さこそが本ものであり、事物と世界の真相、事物の存在そのもののものだ。かつての祝福された世界は、敵意というものを知らぬおさなごの世界であり、子供がいつかは大人にならねばならぬように、この無垢で、透明な世界はいつかは無慈悲に砕け散るのを目撃されなければならないものである。《吐き気》とは、それ故、無邪気な世界から現実の世の中への、小児から大人への生長と変身の一つのしるしなのである。

問題はこの大人の世界で、この現実の中でどうふるまうかであろう。ロカンタンからオレストへの移行は、一步一步具体化される、この現実の中の大人の自由の物語に他ならない。

しかし、『嘔吐』でのロカンタンのブービルからの出発の行くべきはなお不明のままであり、そのはじめての決断である小説を書くという決意は、救いにも照明にもなっていない。『蠅』のオレストも、自らを神話的人物へと化身させることによってしか、以前の意味ある世界から自己を引き離すことができなかった。

できることはただ、あの古い、無垢の世界に別れを告げ、この新しい醜惡な世界に拘り合いをもつことを決意することだけのようである。どのように拘り合おうと決意したとしても、現実の方では何も変わらない。大切なことは、にもかかわらず、現実とかかわり合うことを決意せねばならないということなのである。状況がどのようなかではなく、どのような状況においても、それを引きうけることが、それだけが問題なのである。そののみが、われわれの内面を全面的に変え、子供を大人に、責任と分別のある人間にしてゆくのだ。その後のわれわれの行為をわれわれのものにしてゆく可能性はそれによってしか開かれないのだ。

『汚れた手』のユーゴーが、幼い妻ジュシカとのままごとのような生活を離れて、責任ある大人となったのは、『回収不能』な人間として、いわば自殺的な途を選ぶことによってである。大人の世界でいかに生きるかを、その重量感ある日々の行為を通じてユーゴーに教えようとしたエドレールによってではなく、完全な挫折の中で、状況内で

の自由は肉化されている。エドレールはいつも現実の中で生きている。彼の日々の行為は一つ一つが充実し、真実である。彼は『本当にがっしりしている。』彼の『手に触れるものはみんな真実に見える。』彼が『茶碗にコーヒーをつぐ。僕は飲む。そして彼が飲むのを見る。ところが、コーヒーの本当の味は、ほかならぬ彼の口のなかにあるのを僕は感じる』と、ユーゴーに言わせている。⁽¹³⁾にもかかわらず、この手を汚す、レアル・ポリティークの世界は、その圧倒的な重量感にもかかわらずしりぞけられてしまう。

『自由への道』のマチウにとっても、周囲の友たちの、いつでも確固たる生き方への歩み寄りによってではなく、独軍の包囲下でのクライマックスの十五分間の自殺的な行動の中に、大人の世界への決意と、状況内での具体的自由の肉化が見出される。それまでも、多くの選択にマチウは直面しつづけて来たが、いつもためらい、選ばずに済まそうとした。今、最後に、はじめてはっきり選んだのは、それまでの不決断への復讐の十五分とその後の死である。

ドイツ軍の機関砲に無益にも抗すべく、他の仲間を引きずって彼は村の鐘楼に立てこもる。

『彼は手摺に近づいて、立ったまま射ち出した。それは大規模な復讐だった。一発一発が躊躇への復讐だった。』⁽¹⁴⁾

マチウのこの自由は、一方、依然として、確かに個人的である。しかし他方、ユーゴーのそれと同じように、レアル・ポリティークと現実の計算の重量感への抵抗と拒否とを通じて、それは社会的である。それは、仮空の国イリリを救ったり、仲間の命を助けるために戦ったりするところに目的があるのではない。ただその拒絶を通じてのみ何かとかかわるのである。肯空的であるのは、自己に対してだけである。しかし、実はそれすらも不確実なのであり、待ちうけるのは『地獄としての他者』だけである。

『悪魔と神』の中でくりかえし実現されるのも、再び、この子供の世界から大人の世界への移行のドラマである。ただ、『墓地なき死者』の主人公たちを含めて、それまで死の中でのみ成就されたように見えるこの変身が、ゲッツの中で、はじめて何らか肯定的なものにつながったように見える点に、『悪魔と神』の特殊性がある。もちろん、ゲ

ツッがそこに到達するのには、深い挫切、空しい純粹善の探究の挫切を経ねばならなかった。ゲッツの成功は、深い裏切りの成果である。にもかかわらずゲッツのうちに、真に行動する人間ははじめて肉化されたように思われる。その後の作品以上に、この作品が、サルトルの戯曲の中で最も高い評価を得ているのは、恐らくこのためである。ゲッツはサルトルの諸人物のうちで、『最も遠く自由への道を歩んでいる』といえるのだ。サルトル流に言えば、状況をもっとも具体的な形で引き上げているといえるのだ。

以上のように見てゆくと、サルトルのあらゆる文学作品を貫く根本モチーフが、子供の世界から大人の世界への、ハイデッガーの言う『ひと』(Man)の世界、正義と教養の世界から、裏切りと空しさに満たされた真の世界への、世界内存在への、古典的な近代的自我の自由から、そこからの脱落への、不安と、『吐き気』と、挫切と、死とを介しての移りゆきにあることが分るだろう。

そして、『嘔吐』で設定され、『蠅』その他を通じてさらに深い肉化が進行したこの根本図式を念頭に置いたとき、あの難解な『存在と無』の、事・実・性・と・意・識・とのからみ合いや、存在の粘性と不透明性の分析や、とくに、後半の社会的・か・か・わ・り・合・い・としての自由が身近かな観念となっていることに驚くのである。そして、そこでの他・者・性・の出現も、山・即・自・としての事物の存在の位置も、虚しい明智さで描き出される無の意味も了解可能なものとなっていることを悟るのである。

違うのは、外の世界をただ眺めていたロカンタンから、外の世界に踏みこんで行こうとしているゲッツまでの状況内自由の受肉の進行のみである。この英雄たちを貫ぬく私・生・児・的・な、嫡出ならざるもの、余計なもの、意識、一種の不・幸・な・意・識・にとって、それを分析し、解明してみせる主・客の弁証法は、『存在と無』においてそうであったように、それ自身深部に浸透しきれぬ、表面的なものでしかありえないだろう。

これらの劇は、孤独な英雄のヒロイズムの讃歌であり、自由のオディッセエなのである。

三

主として文学作品を通じて、とくに戯曲を通じて、より高度の結晶作用と肉化が進行した、この生の悲劇の根本的図式が、サルトルの作家としての、また、思想家としての名声を高めつつあるさに、身近かにあったジャンソンですら、四六年から五〇年の間としか推定しえないような⁽¹⁵⁾、一つの変化がサルトルの内面で進行しつつあった。この変化の全体には、今日でもなおはっきりした輪郭で抱ええないような曖昧さが残っている。

まず、『実存主義はヒューマニズムか』と題する講演の中で、サルトルは、古典的ヒューマニズムとは区別されるが、新しいヒューマニズムとしての実存主義を提唱した。『嘔吐』の何よりの意味を、近代ヒューマニズムの告発と、それへの訣別のうちに見るのが常識だっただけに、この四六年の発言は多くの人に衝撃を与えた。

さらに、『現代』誌を創刊し、アルベレスの表現を借りれば、政治的な拘束の中に自ら身を投じ、作家であることは止めないまでも、（『自由への道』の第三部は四九年に出されている、）⁽¹⁶⁾ 少くとも哲学者であることをやめてまで政治的分析に献身するようになったのはなぜだろうか。一九二五年に青年となった世代の知識人たちの運命に従って、サルトルもまた同時代の多くの人々とともに政治の荒野に身を投じたのだろうか。『現代』誌の創刊の辞は、その使命観を良く伝えているように思われる。⁽¹⁷⁾

そして、同じ創刊の辞が、同じく明瞭に語っているように、政治を考え、分析することは、当時およびその後のサルトルにとっては、何よりもまず、現前している巨大な歴史的存在としての労働者階級の歴史的、社会的意義を考察し、分析することに帰着した。『汚れた手』や『自由への道』になぜ重要人物としてコミュニストが登場するのか、『唯物論と革命』や、『文学とは何か』や、やがては『コミュニストたちと平和』によって明らかとなった。『汚

れた手』は、フランスの戦後の社会でのアンテレクチュエルたちの、あがらい難くさえ思われる現実政治への、またコミニズムへの接触の予感と、その宿命への抵抗と嫌悪感とを示している。しかし、それにしても、そこでの知識人の分身ユーゴーの幼なさ比べて、コミニストの政治家エドレールの何と堂々として、現実感にあふれて、しっかりと地に足をおろして行動していることだろうか。ユーゴーの幼稚な原則論が、結局はこの現実感にあふれた存在に死をもたすが、それは、ユーゴー自身にとってさえ信じられないような出来事だったのである。他方、エドレールの方は、その現実感覚の故に、現実政治の葛藤が、この幼稚なインテリの手を借りて自分の上に死をもたらすことありうるのを良く知っていた。偶然事が事の進行を狂わせさえしなかったならば、(幼妻ジェシカはこの狂言まわしのためにのみ用意されたデウス・エクス・マキナのようなものだ) 恐らくユーゴーへの説得によって、エドレールは死を避けることさえできたのだ。コミニズムのレアル・ポリティクは、餓えのためにのみ組織に参加した、無智なスリックのような党員たちによっても支えられている。(このスリックのなんと類型的なことか。東欧のコミニズム劇には欠かせぬ一つの類型でしかそれはない) そのような組織を動かしている有効性の論理に対して、ユーゴーが、さらには『汚れた手』全体が、それを告発しようとしているのか、それとも、それに屈服することをもって終っているのかさえも明瞭ではない。

労働者階級という現実の存在と、コミニズムという一つのイデオロギーとをあくまで引き離したいという根強い願望を至るところで示しながら、そして、このイデオロギーが現実化して、地上の労働者たちという人間存在と結びつきうるのは、その積極的、肯定的な主張によってではなく、戦争というネガティブな現象を介してでしかありえないことを指摘しながら、結局は、『多義性の存在論は矛盾の倫理学に』、『存在と無』は、『弁証法的理性批判』に、実存の『存在論的定義づけ』は、その『歴史的定義づけ』に、要するに、史的唯物論によって取って替わられることとなるのである。

すぐ後で『弁証法的理性批判』の序論となった論文、『方法の問題』は、マルクス主義を現代の支配的思想と規定し、実存主義をその補助的イデオロギーに引き上げることが明言して、またまた衝撃を与えたが、ここでは、サルトルをそこまで引きずって来たおもしは、なによりもまず労働者階級の現実的存在だったと述べられている。⁽²⁰⁾ 存在から歴史への、抽象的人間から具体的人間への移行のもう一つの側面は、結局、解放後のフランスの歴史の中で労働者階級の否定しがたい力への注目から生じたのである。『嘔吐』から『蠅』への移行を促した占領下の体験が、結局は、その後も生きつづけていたのである。『汚れた手』は、後に一種の反共劇と見なされて、サルトル自身もフランスでの上演を拒絶したりさえした。しかし、あの劇中でのエドレールの重量感が、すでにその後の歩みを予告していたのである。⁽²¹⁾

マルクス主義のうちには、若きマルクスのうちに見られるような見事な人間解放の哲学と、それを窒息させ、硬化させる、教条的な唯物論的形而上学の神話とが混在しているという、サルトルの『唯物論と革命』における分析と批判とは、ただちにルカーチの『実存主義かマルクス主義か』での反論を喚び起した。この段階でのサルトルとマルクス主義者とのやりとりは、公式のそれまでの論争の型をそう出たものではないが、その後もサルトルを第三の途の思想家として扱えつつ、彼とマルクス主義との距離を強調するという形の批判は繰り返し提出されている。⁽²²⁾

肝心なのは、サルトル自身が変ったかである。『コミュニストたちと平和』において、果してサルトルのコミュニズムに対する態度は変化したのだろうか。五一年に書かれた『悪魔と神』の肯定的な余韻を、五二年の『コミュニストたちと平和』の第一論文に見出すことができるだろうか。

ある意味では、確かにサルトルは変わっている。この論文のうちに、彼は、『共産党がどの程度まで労働者階級の必然的表現であるか、またどの程度にその正確な表現であるか』という問いを提起する。⁽²³⁾ 抽象的で絶対的な善と悪の代りに具体的な生をという『悪魔と神』の帰結は、二重の意味でこの論文に反映している。一つは、あらゆる社会悪

をすべて資本主義と、帝国主義に帰着させて満足しようという公式論への、サルトルが既に繰り返し返して来た嫌悪である。もう一つは、労働者階級の運動におけるあらゆる政治的誤謬をコミニズムというイデオロギーのせいにするという、それまでの彼を強く惹きつけて来た誘惑への反省である。真のあるべきプロレタリアの哲学と、現実のプロレタリアとの間には、たしかに現に、コミニズムの、フランス共産党によって提示されている正統的なイデオロギーが介在している。しかし、今や、存在のかわりに歴史を、抽象的原理のかわりに具体的事実を選ぶことを決意した以上、プロレタリアの根本的改宗という夢想を捨てて、彼らが現に選び、従っているところのイデオロギーもろともプロレタリアを受け容れねばならない。闘争をゼロからはじめることはできないのだ。プロレタリアが現にコミニズムを受け容れて、それを彼らの特異な本性の一部としているという、この『不快な真実』を今や承認しなければならぬと、サルトルは言うのである。今や、エドレールの論理が勝ちを占めたのだ。『悪魔と神』と『コミニストたちと平和』は互いに照応し合いつつながら、この変化を現し出している。ヒロイズムと、受難と、殉教と、犠牲との後で、忍耐と献身と服従の没我的な生が姿を現し出す。『キーン』でのヒロイズムの喜劇性のバクロを通じての、そこから脱出と超越の努力が現れる。⁽²⁴⁾

その主体と客体の弁証法の枠の許す範囲において、客体と、客観主義的態度とへの最大の譲歩が、この後に続くのは極めて自然であろう。唯物論は今や、それ自身の革命性を認められ、精神の健康さの一つのあかしとなってゆく。挫折と歴史的なものの拒否としての、ヤスパース流の実存哲学と区別される、建設的で、歴史的な、別の実存主義が発想される。⁽²⁵⁾ ちょうど、ヘーゲルに対してキルケゴールが果たしたような、人間の具体的で、個別的な存在し方にもとづく補足を、今やマルクスに対して自分が果たすべきときがやって来たのだ。マルクスは、他のあらゆる時代の生きた哲学と同じように、百千の創意を通じて、なおわれわれのうちで生きつづけている。しかし、それは、今一時的に停滞し、硬化しているのだ。スターリン時代とはまさにそのような時代だったのだ。このマルクス主義の一時的停滞

が、ハンガリー事件という危機を通じてバクロされた。スターリン批判の核心は、構・成・的・で・か・つ・歴・史・的・な・人・間・学・を・生・み・出・す・こ・と・の・必・要・を・指・摘・す・る・こ・と・で・あ・り、そのためには、方法・を・問・題・と・す・る・こ・と・が、マルクス主義の弁証法の批判が必要である。『弁証法的理性批判』で展開されたこのような主張と、それもとづく試みは、四六年から五〇年頃にかけて生じた変化の一つの帰結であり、その変化の指し示す方向の具体化であった。あらゆるサルトルの研究書が、この時期以後、彼とマルクス主義の関係について少くとも一章をさかざるをえなくなった。

すでに、『コミュニストたちと平和』の三つの論文を通じて、ごくわずかの周囲の若い友と、シモーヌ・ド・ボアヴォアールとを除く、ほとんど全ての旧友を失い、時には敵にまわしさえしたかわりに、フランスやソヴェエトのコミュニストたちのいんぎんで、ひかえ目な批判の態度という代価だけを獲得したサルトルは、現実にはこれ以後完全な孤立状態に身を置くこととなった。

アルジェリアの汚い戦争に対する戦い方をめぐって、また、チェコ事件に対する態度について、国内の、また国際的な大事件について、サルトルとフランスの共産党の考え方はいつも大きく違い違った。ガローディや、フランスの他のマルクス主義者たちとの、いんぎんな対話の積み重ねの試みは、結局何らの歩み寄りもたらさなかっただろう。ガローディは確かに変ったが、サルトルは何ら変らなかつた。蜜月は数年の後に終り、再び、サルトルは孤独な知識人のヒロイズムに立ち帰ったようにすら見える。

ニセの知識人と、真の知識人とを区別して、その専門的知識を通じて、何らかの体制に奉仕する技術者たちとは別に、知識の、役に立つ技術ということとは別の、より本質的な機能である批判力・を行使する、真の知識人がいつの時代にも存在したし、また存在すべきである。このテクノロジーの時代たる現代においては、あらゆる体制が知識の技術者たちを求め、生産する。プロレタリアは確かに、知識人が自分の側に立ってくれることを要求する。しかし、知識人の真の役割は、孤立に耐えながら、その主体性を失わずに、自己の矛盾に満ちた状況を引き上げることを通じ

て、時代の矛盾を体现し、そのことを通じてのみ、プロレタリアの階級的自覚と結びつくことである。知識人の孤独は、いわば彼の『本来の分け前』なのである。⁽²⁷⁾

一九六六年九月の来日の際に、相ついで行われた三つの『知識人』をめぐる講演は、サルトルとマルクス主義との接近の結末を示しているように思われる。ドラマは終わったのであり、現前するプロレタリアに向つておこした前進は、どこかですれちがいに終わったことが明らかとなった。再び、『唯物論と革命』のサルトルは甦ったのであり、この観点から見かえすと、『コミニストたちと平和』でのマルクス主義の極めて主意的な把え方の中でも、『弁証法的理性批判』における、マルクス主義のエンゲルスの、実証主義的、悟性的側面と、マルクスの、批判的、理性的側面との区別という構想のうちでも、サルトルが決して、エンゲルスやレーニンの言うような意味での自然の弁証法や、唯物論を承認してはいなかったことが確認されるのである。その時々で、理由づけに違いはあったとしても、唯物論を認めないというサルトルの態度は変化していない。デサンが、その『サルトルのマルクス主義』を論じた最後の章において、サルトルを『最後のデカルト主義者』と呼び、あくまでコギトから出発しようという態度の中にその根拠を求めているのには必ずしも賛成しえないが、他方、ジャン・ヴァールがある論文で早くから指摘していたように、サルトルの対象概念が極めてデカルト的延長に近く、このことが本来現象学から出発したサルトルの立場を、超越論的主観性の貫徹を許さない、二元論的なものに引きさいていることは認めなければならないだろう。⁽²⁸⁾サルトルにおいては超越論的な主観性については積極的な姿を現わさず、そのために彼は、逆に歴史的なものの存在論的なものの優位を認めるという、ハイデッガーとは異なる途に迷いこまざるをえなかったのだとさえいえることができるだろう。

このように、一方でサルトルはつぎつぎに変身を遂げて来たが、他方では、全く変るところがなかったのであり、そのことは、マルクス主義に対する態度についてもはっきり確認できると思う。そして、このように、一方で変ることを余儀なくされながら、他方で変りえなかったのは、彼の哲学的思索の中途

半端さを示しているとしか言いようがない。結局のところ、彼は存在論的な立場と、歴史的な立場、いいかえれば実存哲学とマルクス主義の間を、主として実存哲学の側に身を置きながら、絶えず往復しつづけたのである。⁽³⁰⁾

にもかかわらず、サルトルの哲学がどのように注目を浴びつづけ、高い位置づけを獲得しつづけたのはなぜだろうか。確かに後期のフッサールのような現象学の立場そのものが、その超歴史的な主観性の構想そのものが、デカルトのコギトと比べてすら、世界（延長）を導出し、保証しえないという点で、その限界を指摘できるといふことを、また、ハイデッガーの存在論が、結局は抽象的なモラルしか導き出しえないというその没倫理性を批判しうるといふことを別にしても、サルトルのこの現象学的存在論における不徹底は一つの大きな利点を持っており、彼自身そのことを充分に自覚していたということをここで指摘しておきたい。それは彼が、その鋭い時事問題への分析力と、豊かな社会感覚からして、知識人と学生たちのうちに存在しつづけている実存主義の人間観と、マルクス主義の社会思想を結合したいという根づよい願望をしつかりつかんでいたということである。ここでも、また他の場面でも、一見センセシヨナルで、また首尾一貫しない彼の哲学的発言の背後には、第一級のジャーナリストとしての彼の才能から生れる鋭い着眼がいつも見出される。彼の文学は、その文体の簡潔さ、その主人公の現代性、その肉づけの見事さなどからして現代フランス文壇の第一級の作品であることは間違いない。ジイドなき後の巨匠の一人であることは誰もが承認せざるをえないだろう。しかし、スタンダールや、バルザックや、フロベールや、ヴィクトル・ユーゴーや、さらにはゾラと比べてさえも、彼の作品が、これらの大作家と並んでフランス文学史のうちに残りうるかどうかについては判断を躊躇わざるをえないだろう。また、彼の哲学作品が、ベルグソンなき後のフランスの哲学界において、最も個性的な思想を示しているものの一つであることは同様に誰もが承認するだろう。しかし、この面では、彼は、その一貫性、説得力、とくに明哲さにおいては、同時代のマルセルや、メルロー・ポンチにもあるいは劣るかもしれない。

い。まして、ベルグソンに比するとき、その優劣は明らかであるように思われる。

それ故、残るところは、その第一級のジャーナリスト的なセンスに対する評価であつて、この面では、サルトルは、フランスが世界に誇りうる才能を示しているように思われる。要するに、『現代』誌での諸活動は、彼に最も適した形態ということができ、さらにつづめて言えば、現在までのところ七巻が刊行されている彼の評論集『シチュアシオン』の諸論文の中に、とくに、そのⅡ所収の『文学とは何か』の中に、彼の文学作品と哲学作品をとくに鍵が秘められていると言ふべきであらう。^(註)彼の哲学を解くものはその文学であり、文学をとくものは、その評論なのである。そこに、サルトルの実存主義の成果とともに、秘密がこめられているのである。サルトル自身が言うように、パスカルの『プロヴァンシアル』は或る意味で時事問題をめぐつての論争の見事な一例であるといえるだろうが、『パンセ』がもしなかったら、パスカルの不滅の栄光は存在しなかっただろう。サルトルは自己の『パンセ』を果して持っているだろうか。パスカルのたとえば、『自己は嫌わし』という、『パンセ』のたった一断片の持つ、集中的でかつ巨大な思索に匹敵する文章を、サルトルがその作品の中で実現しているかどうかは疑わしい。その作品の持つ、人をとらえて放さない魅力と、その中にちりばめられる数々の優れた表現への讃嘆をあえて傍に置いて、サルトルに対して前記のような視点を設定することが、サルトルを最も良く理解するために必要だとの判断を、永年にわたるこの思想への考察の末に、今この時点で持つに至った。このような判断は、彼の哲学的努力を軽視するためではなくて、むしろ、彼の評論家としての、恐らく、今後すぐにはその後継者の現れることがないだろうと思われるような、今世紀にきわ立つ才能への讃嘆から生れたものである。六五年頃から、サルトルたちの目は中国や中南米にそがれているようである。^(註)このことも彼の才能のこの面での豊かさの一つの証拠だと思われる。

① Jeuneur; Le biographe universel et la pensée de Sartre, 364p, 1962, b 13.

① Wilfrid Desan; The marxism of Jean-Paul Sartre, Anchor Books, 1965. の日本語版への序文、玉井・宮本訳、筑摩書房。

② Sartre; Situations, II, Qu'est-ce que la littérature? p. 76.

③ 一九四六年の『実存主義はヒューマニズムか』におけるヒューマニズムに対する肯定的態度は、明らかにそれ以前のサルトルの叙述と違っている。この講演の後で行われた討論でも、そのことは直ちに指摘された。『コミュニストたちと平和』の第一論文が、一九五二年に『現代』誌に発表されたときにも、それ以前と違う共産党に対する融和的な態度が、多くの人々を驚かせた。一九六一年に『弁証法的理性批判』が発表されて、マルクス主義を今日における唯一の生きた、支配的な哲学だと規定し、実存主義はその補助的イデオロギーとして生きる途があるだけだと述べたとき、人々の驚きは頂点に達した感があった。こうしたことは、彼とマルクス主義との関係についてだけ起こりうることでなく、多くの時事問題についての発言そのものがおおむね衝撃的である。

④ たとえば、

R. D. Cumming; The Philos. of Jean-Paul Sartre, Random House New York, 1965.

A. Stern; Sartre, His Philosophy and Existential Psychoanalysis, Delacorte Press, New York, 2nd Ed. 1967.

J. Blackham; Six Existentialist Thinkers, Harper Torchbooks, New York, 1959.

J. L. Salvan; The Scandalous Ghost, Wayne State Univ. Press, Detroit, 1967.

C. Smith; Contemporary French Philosophy, London, Methuen & Co. Ltd. 1964. (p. 27. et suiv.)

などがさし当り目につくが、その他にも合同出版から訳が出た『イタリーのキョーディの『サルトルとマルクス主義』、理想社から訳が出た『ビーメルの『サルトル』なども特徴ある作品として挙げられる。これらは勿論、著者の立場によってサルトルの扱い方はことなるが、一九六一年以前のものは、主として『存在と無』を中心に扱っているのに対して、それ以後のものはマルクス主義との関係を正面から扱っているものが多い。入門的な概観の場合にも、少くとも、一章をこの問題に当てている。

フランスにも勿論、サルトルの哲学を論じた作品はかなりある。ク・セ・ジュ文庫などの入門的なものを除くと、

G. Varet; L'ontologie de Sartre, P.U.F., 1948.

F. Jeanson; Le problème moral et la pensée de Sartre, 1947, 2^eéd. 1965, aux Éditions du seuil.

J. Wahl; Les philosophies de l'existence, Armand Colin, 1954.

- A. Niel; J.-P. Sartre, héros et victime de la "conscience malheureuse." Éd. "Courrier du livre," 1966.
- J. Houbart; Un père dénature, René Julliard, 1964.
- E. Mounier; Introduction aux existentialismes, Denoel, 1947.
- M. Merleau-Ponty; Les aventures de la dialectique, Gallimard, 1955.
- G. Lukács; Existentialisme ou marxisme? Nagel, 1948. (Traduction)
- C. Audry; Sartre, Seghers, 1966.
- J. Lacroix; Panorama de la philos. française contemporaine, P.U.F. 1966.
- L. Sève; La philos. française contemporaine, Editions Sociales, 1962.
- A. Cuvillier; Anthologie des philosophes français contemporains, P.U.F. 2^eéd. 1965.
- L'arc, n° 30 (numéro spécial); Sartre aujourd'hui, 1966.
- La nouvelle critique, n° 173, 174 (numéro spécial); Sartre est-il marxiste? 1966.

などを挙げるこゝである。

一九六六年に集中的に研究書や、雑誌の特集が出ていることが目につくが、一般的に言つて、これらの哲学的研究はサルトルに対して批判的である。これらの中では、ヌーヴェル・クリティクの特集と、ニールの研究がとくに参考になった。しかし、これらのいずれもが、ジャンソンとアルベレスの作品ほどには、サルトルの全体像をつかむ手掛りとなりえなかつたところに、サルトルの哲学作品の分りにくさがある。

東欧のものとしては、岩波現代叢書に入っているアダム・シャフの『人間の哲学』を挙げることができる。その他、ソヴィエトでも、一般的なイデオロギー批判の一部としてサルトルにも言及するいくつかの論文が『哲学の諸問題』誌に載せられていることを附言する。

- (5) たとえば、ク・セ・ジュの『トロティニョン』現代フランスの哲学』第一部、および、巻末の文献表など参照。
- cf. J. Desanti; Phénoménologie et praxis. Éd. Sociales, 1963.
- (6) F. Jeanson; Sartre par lui-même, Éditions du seuil, 1958, pp. 11 ~ 12.
- アルベレス『サルトル、人と作品』理想社刊、松浪訳、一六頁。
- (7) Jeanson; Le problème morale et la pensée de Sartre, 2^eéd., 1965, p. 13.

- (8) フレッシュマン、前掲書、第二章参照。
 - (9) Jeanson; op. cit., (1958), p.p. 18 ~ 19.
 - (10) La nausée, p. 167. (Gallimard)
 - (11) ibid., p.p. 162 ~ 3.
 - (12) フレッシュマン、前掲書、四七頁以下。
 - (13) Les mains sales, p. 132, cf. p. 240.
 - (14) Les chemins de la liberté, 3) "La mort dans l'âme," p. 193. cf. Jeanson; op. cit., p.p. 20 ~ 21
 - (15) Jeanson; op. cit., p. 155.
 - (16) フレッシュマン、前掲書、一四二頁以下参照。
 - (17) Situations, II, p.p. 9 ~ 30.
 - (18) Situations VI, Les communistes et la paix, p.p. 335 ~ 336.
 - (19) Jeanson; op. cit., p.p. 162 ~ 163.
 - (20) Critique de la raison dialectique, Question de méthode, p.p. 22 ~ 24. (Gallimard)
 - (21) Jeanson, op. cit., p.p. 167 ~ 3) cf.
- コミニズムを肯定的に考えるということは、一方、エドレーをゲッツと関連させるとともに、他方、カノリス『墓地なき死者』に現れるコミニストと関連づけて位置づけることだと、ジャンソンはここではつきり指摘している。
- すなわち『弁証法的理性批判』の背後には『汚れた手』や『悪魔と神』があり、さらに、そのうしろには『唯物論と革命』や『コミニストたちと平和』があるのである。
- (22) L. Sève; La philos. française contemporaine, Chap. V, surtout, p.p. 317 et suiv.
 - (23) Garaudy et al.; Méseures de l'anti-marxisme, Éd. Sociales, 1956, etc.
 - (24) Situations, VI, "Les communistes et la paix," p. 88. cf. Jeanson; op. cit., p.p. 155 ~ 156.
 - (25) Jeanson; op. cit., p. 105.
- Critique de la raison dialectique, Question de méthode, p.p. 18 ~ , surtout, p. 22. cf. Kierkegaard vivant, N.R.F. 1966, p.p. 20 et suiv.

サルトルのキルケゴールへの基本的観点は、この論文の中でよく敷衍されている。

(26) R. Garaudy; *Perspective de l'homme*, P.U.F. 1961, Chap. 1^{er}, p.p. 59 et suiv.

Marxisme et existentialisme, une controverse sur la dialectique, par Sartre, Garaudy, Hyppolite et al. 1961. etc.

(27) サルトルの来日の際に行った三つの講演は、人文書院から『知識人の擁護』という表題で訳が出されている。同書所収の『知識人の位置』および、『知識人の役割』とくに、六一頁以下参照。

(28) W. Desan; *The marxism of J.-P. Sartre*, Chap. X, p.p. 260 ~ cf.

(29) ジャン・ヴァール『実存主義的人間』、人文書院刊所収、『実存主義史概要』、三九頁以下参照。
cf. Desan; op. cit., Chap. X, p.p. 278 ~.

(30) 『弁証法的理性批判』でサルトルが提起した、構成的でかつ歴史的な人間学は可能かという設問自体の中に、その中途半端さが端的に現れている。

(31) ジャンソンとアルベレスが、サルトルの全作品のいわば導きの糸として利用しているのが、『文学とは何か』という、この比較的

長い評論である。『raison dialectique, Question de méthode, par Jean-J. Garraud』

(32) *Les temps modernes* 誌の各号、とくに七〇年の3月、7月、8・9月、10月の各号 (No. 284, 288, 289—90, 291) など参照。

(33) *Signatures* / I^{er} Les communistes et la bourgeoisie, bte 129—130

(34) *Signatures* / II^e bte 131—132

(35) *Signatures* / III^e bte 133—134

(36) *Signatures* / IV^e bte 135—136

(37) *Les chemins de la liberté*, t. 1, Les mots pour l'âme, bte 137 et Jean-Paul; op. cit. bte 30—31

(38) *Les chemins de la liberté*, t. 2, bte 138 et 139

(39) *Les chemins de la liberté*, t. 3, bte 140 et 141

(40) *Les chemins de la liberté*, t. 4, bte 142 et 143

(41) *Les chemins de la liberté*, t. 5, bte 144 et 145

(42) *Les chemins de la liberté*, t. 6, bte 146 et 147

(43) *Les chemins de la liberté*, t. 7, bte 148 et 149

(44) *Les chemins de la liberté*, t. 8, bte 150 et 151